通信使・燕行使と近世日本

程永超

近世（十七世紀から十九世紀にかけて）の東アジアでは、日本・朝鮮・中国（明・清）それぞれの二国間関係について、朝鮮から日本に通信使と呼ばれる外交使節が派遣され、朝鮮から中国(明・清)に燕行使が派遣され、日本と中国の間には外交使節の往来が無かった。先行研究は、もっぱらこれら二国間関係を論ずるばかりで三国間関係として論じることがなく、正式な国交をもたない日本と中国が通信使と燕行使を介して繋がっていた点への着目がこれまであまりに不足していた。燕行使と通信使を同時代的に比較して研究することは、日本でも韓国でも近年になってようやく本格化しはじめ、中国には参照すべき研究がない。現時点での到達点は夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』（名古屋大学出版会、二〇一五）である。

それに対して、本論文は、江戸時代日朝関係史の根幹と見なされてきた外交使節たる通信使と朝鮮王朝の中国朝貢使節たる燕行使との比較・関連を考察した上で、近世の日朝関係史を再検討するものである。序章、本論六章、終章で構成される。

序章「通信使研究を問い直す － 燕行使との関連性から － 」では、近世対外関係史研究を整理し、いままでの通信使研究の問題点を以下のように指摘した。それは、①通信使研究は、日本でも韓国でも日韓関係史の観点からのみ追究され、中国(明・清)が朝鮮王朝の宗主国であることに起因する間接的な影響を考察から除外してきた、②通信使研究の現状では、日本と朝鮮と中国の三国を結び付ける動線が見えない、③通信使と燕行使という異なる外交使節を重複して経験した人物がいるという事実に誰も着目してこなかった、である。それに対して、(1) 朝鮮を通じて中国へ到るという視座を取る、(2) 同一人物で通信使と燕行使をともに経験したもの（以下、「重複経験者」と呼んでおく）を中心に、通信使と燕行使の連繋性・比較を考察する、という二つの方法で問題の解決を試みた。

第一章「呉允謙の回答兼刷還使経験と朝天使経験」では、呉允謙を例に、十七世紀前期における通信使経験・燕行使経験が一人の人物の経歴にどのような影響を及ばしたかを明らかにした。一六〇九年、朝鮮国王光海君は呉允謙を東萊府使に任命し、一六十七年には、回答兼刷還使の正使に任命した。一六二二年、明朝中国への朝貢路を陸路から海路に変更を余儀なくされた際に彼は登極使の任命を受けた。船で日本に渡った経験は登極使の履行に資するところ大であった。十七世紀初期の朝鮮では、通信使経験・燕行

使経験が中央政界の地位上昇に大きく影響したこと、領議政（いわゆる総理大臣）のような重臣には国内だけでなく中国と日本への関心を持つことが必須であったことを明らかにした。

第二章「通信使関係倭情咨文と明清中国」では、朝鮮王朝が日本の状況を中国に通報した書類（倭情咨文）に注目し、通信使・燕行使ふたつの外交使節派遣の背景にあって日本・朝鮮双方に大きな政治的・文化的影響力をもっていた中国（明・清）の動向に関心を向けた。とくに近世東アジアの国際秩序を再編することとなった明清交替期（十七世紀半ばから末）における通信使派遣に焦点を当てて、日本と朝鮮の二国間関係が中国の動向といかに緊密に連動していたかを究明した。一六〇七年から一八一一年に至る十二回の朝鮮通信使にかかわる倭情咨文を検討し、清朝には通信使を活用して日本情報を収集する目的のあったこと、とりわけ一六四三年通信使に際しては直接的な政治干渉すら見出せることを明らかにした。通信使の背後には、明らかに中国（明・清）の政治的影響力が潜んでいたことを明らかにした。

第三章「日中観察の比較–趙珩の通信使行と燕行使行–」では、趙珩の通信使使行録『扶桑日記』と燕行録『翠屏公燕行日記』の比較研究を試みた。これまで朝鮮通信使の正使としてしか知られてこなかった趙珩の外国使行経験について、地方官員と外交使節との関係、朝鮮被虜人の実態と本国送還に即して、通信使・燕行使それぞれの場合の比較を試みた。

第四章「一七一五年～一七一七年の八包定数の厳格化と日朝関係」では、「八包一件」の背景・経過などを体系的に検討した。一七一五年～一七一七年に中朝貿易の八包貿易に関する定額令「八包定数」（銀の流通統制政策）が厳格に適用された。これに対して倭学訳官・東萊商人（朝鮮側）および倭館・対馬藩国元（日本側）それぞれがどのように対応したかを検討した。それによって、朝鮮の対清貿易と対日貿易が相互に連動していたことを具体的に指摘し、特に八包定数の不遵守によって、「銀の路」と「絹の路」が繋がれたことが明らかになった。

第五章「外交使行と語学書の改修・再刊行–洪啓禧の通信使経験と燕行使経験を中心に–」では、通信使の派遣が朝鮮に何をもたらしたかについて、洪啓禧という人の通信使経験と燕行使経験を統合的に検討し、語学書の改修・再刊行と外交使行の関係を明らかにした。洪啓禧は日本使行に際して朝鮮王朝の訳官たちの語学能力の低下に気づき、その要因が日本語学習教科書の内容が現状に合わないほど古いことにあると考えて、教科書の修訂・再刊行に取りかかった。それが契機となって燕行使として中国に行く機会

に恵まれ、また中国語教科書の修訂・再刊行にも関与した。その後も朝鮮王朝の音韻書を編纂した。こうした一連の語学書に関する事業の出発点は、洪啓彼の通信使正使の任命にあった。

通信使の来日時には筆談で日朝間の意思疎通がなされることが多かった。第六章「通信使の筆談と大陸情報収集」では、こうした筆談を当該期日本における中国情報収集の必要性という観点から再検討した。そのために通信使の残した筆談史料中における中国情報をひとつひとつ確認しながら、近世日本における通信使招聘の意味を中国情報収集の角度から再検討した。そうした作業を経て、従来は最後の通信使としてのみ理解されてきた一八一一年通信使（対馬易地聘礼）について、当時の東アジア国際情勢との関連から再考察した。当時の江戸幕府が中国北方情報を収集する必要性を強く感じていたこと、実際にそうした収集活動を一八一一年通信使（対馬易地聘礼）に際して行ったことを論じた。通信使の筆談を介した中国大陸情報収集への関心は江戸時代を通じて幕府側に常に強くあり、それはそれぞれの時期ごとの東アジア国際的環境によって規定された。ただし、日本・朝鮮・中国三国によって構成される国際秩序が安定しているあいだは、そうした大陸情報収集が目立たなかっただけである。大陸情報収集の重要性が明瞭となるのは、十八世紀末から始まるロシア勢力の南下にともなう東アジア情勢の急激な変化を要因とする。一八一一年通信使は、十八世紀末十九世紀初頭における東アジア国際環境の急激な変化（近代化）への対応でもあった。

終章「通信使と燕行使が繋がる日本と中国－ もうひとつの近世日中関係史 － 」では、まず十六世紀末～十七世紀初頭における日明国交回復交渉の具体像を分析して、本論文が取り扱う時期の東アジア国際秩序の成り立ちと、それにつながる日本―朝鮮―中国三国間の交渉の様子を検討した。そのうえで、第一章～第六章の研究成果を踏まえて、近世における日朝関係と中国の関連性について整理を行うとともに、今後の課題と展望について述べた。

本論文の六章を通して、清朝中国との関係を踏まえることで東アジア全体のなかで江戸時代の通信使及び日朝関係を捉えるよう努めた。国家からの視点と人物からの視点に立って東アジア国際関係において日・朝・中三国が絡み合う歴史像を明らかにした。近世の日朝関係は、幕府・対馬・朝鮮という三者の関係のみで構成されるのではなく、中国及び近世東アジアの国際情勢と深く関連していることを明らかにした。

こうした通信使と燕行使の連繋性、あるいは日朝関係と中朝関係の連繋性により、江戸時代には直接的な政治外交関係を結ばなかった日中間の間接的な連繋性も浮かび上が

ってきた。対馬藩と朝鮮という二重のクッションを挟んで、徳川幕府と中国とが繋がるようになったのである。それは日朝関係史・中朝関係史という個別の二国間関係史の単純な集積ではなく、日朝関係の背後にある中国の影響、中朝交渉の際に現れる清の日本関心、直接外交関係のない日中関係を媒介する朝鮮の位置付け等々を介して具体的に繋がっている。本論で明らかにしたのは、そのような日・朝・中の三国間関係史であり、江戸時代日中関係史の新たな描き方でもある。